

## 硫黄島活性化に向けての一考察

教育学研究科 1 年 濱島実樹

はじめに

先日、鹿児島県三島村は硫黄島を訪れた。豊かな自然が多く、行政も自然を用いた地域の活性化を試みていることが感じられたが、地域の活性化を目指すならば自然に頼るばかりではなく、多方面から観光客のニーズに応えた地域の活性化を図っていく必要があるだろう。そこでここでは、私自身の専門分野である教育面と歴史の面から、硫黄島の活性化へ向けた提案を行っていききたい。

### 1) 教育面からのアプローチ

硫黄島には三島村小学校・中学校という小・中併存校がある。特徴としては小学校・中学校合わせて児童・生徒数が 14 人と少人数であること、教師が臨時免許をもって複数教科を掛け持ちしていること、しおかぜ留学制度を設けていることなどが挙げられる。これらの特徴をもとに、教育面から硫黄島の活性化にアプローチしていこうと考えた場合、「小規模校であること」をプラスの側面と捉え、活用していくことを提案したい。日本の戦後教育において「小規模校」は教育の機会均等の観点から、解消すべき対象とされてきている。例えば、今回の三島中学校の事例のように教師が臨時免許を取得して複数教科を掛け持ちする場合、臨時免許をもとに特定の教科への教授が可能となったとはいえ、自身の専門分野ではないため、教師の苦労は計り知れず、授業内容も専門教科以上に教師の力量が問われてくるだろう。また、小規模校のため限られた人数の中で子どものモチベーションを高め合うことが難しく、学力の向上がままならないという側面もある。つまりは、大規模校と小規模校で学力の差が生まれてくる。

### ○硫黄島の特色を有効活用する

このように小規模校が以上のような側面をもつ中でいかにして地域の活性化に役立てていくのか。すなわち硫黄島の特色を有効活用した授業づくりである。例えば硫黄島を案内してくれた行政の方もおっしゃっていたが、硫黄島の自然について専門的知識をもつ人が、定期的に出前授業という方法で、子どもたちに知識を教授するというのは大変魅力的であろう。その際、ただ知識を教えるだけではなくて、子どもたちが体験的に活動できる要素を取りこむと、その魅力度は増す。現在、博物館と学校の博学連携が言われている中で、島全体を博物館と捉えた最先端の学びが実現できる。なお、硫黄島には様々な分野の研究者が訪れているということなので、彼らの専門的知識を子どもたちに還元できる環境づくりが望ましいと考える。さて、地域の活性化に必要なのは、研究者による最先端の学びを全国的にアピールし、硫黄島の魅力として発信することである。つまり、この「学び」を観光の資源として活用することである。そのため、知識を教授する対象の大前提は子どもたちとしながらも、生涯学習という概念から大人をターゲットにした学びの場を提供することも提案したい。さらには自由研究の材料の場としての提供も一つの方法だろう。

### ○本土の子どもたちとの交流

次に提案したいのが、本土の子どもたちとの交流である。交流の場を設けることで、硫黄島を知ってもらうことも活性化の一つの手段だと考える。具体的な方法として、一つ目に「本土の小・中学校と姉妹を結ぶこと」である。本土の学校と姉妹関係を結び、互いに学校訪問を行う。硫黄島を訪れた子どもたちに硫黄島の良いところを発信してもらう。姉妹関係を結べば、その関係は定期的に持続し、硫黄島についての情報発信も継続していくことになる。二つ目に「交流授業」である。小学校 3 年生の単元に鹿児島について学ぶ単元がある。鹿児島の特色について学ぶ際、定番となるのがシラス台地についてなのだが、鹿児島の特色の一つとして離島を取り上げた授業を見たことがない。そこで、硫黄島を授業の教材としてアピールし、硫黄島の自然や文化を知ってもらう場を設ける。例えば、テレビ電話を用いて授業の中で本土の子どもたちと交流することも可能だろうし、社会科見学の場としての提供も可能となるだろう。

### ○海士町の実践の紹介

最近注目されている島に島根県隠岐郡にある海士町がある。この島が注目されている背景として、I ターン者の増加が挙げられる。I ターン者の増加への取り組みとして海士町は様々な取り組みを行っているのだが、ここでは海士町の教育面に着目したい。海士町にある隠岐島前高校では、少子高齢化の社会の中で、生徒数が毎年増加傾向にあるという特徴をもつ学校だ。具体的には三島村の「しおかぜ留学制度」と同様に「島留学」を実施し全国から生徒を募集している。「島留学」の特徴としては、島外から留学生に対して旅費や食費を補助したり、「夢探求」出前授業と銘打って積極的に外部からの講師を招いている点が挙げられる。また、普通科でありながら進路に応じて科目を選択できる点も魅力的だろう。<sup>1</sup>

海士町の実践を見る限り、アピールポイントを前面に押し出すことが地域の活性化につながるかと考える。上記で提案した出前授業や外部との交流といった点の拡大を図り、情報を発信していくことが硫黄島の活性化につながるのではないだろうか。さらには、少人数であるからこそ、教師一人一人が子どもに関わる時間を大規模校より多く取れる点や、硫黄島の自然や文化に触れることで豊かな人間形成につながる点など、小規模校の良い点をアピールしていく必要がある。

残念ながら今回硫黄島を訪れて、三島小・中学校の子どもたちと関わることはできなかったのだが、教師の話を聞いている限り、子ども同士の仲がよく地域と密接に関わっている様子が伺えた。近年、教育界では家庭や地域との連携が求められているが、今回のような小規模校では家庭・地域との連携が図りやすく、開かれた学校になりやすいというメリットを指摘できる。また、その一方で、三島小・中学校の特別支援の実態や、学力問題の実態、硫黄島から鹿児島本土へ渡っていった子どもたちの様子（離島から本土へ渡った子どもは、環境の違いから萎縮しやすい傾向がある）などを気になる点としてあげておく。

---

<sup>1</sup>・島根県立隠岐島前高等学校ホームページ <http://www.dozen.ed.jp/> (最終閲覧:2015.7.17)  
・海士町ホームページ <http://www.town.ama.shimane.jp/> (最終閲覧:2015.7.17)

## 2) 歴史的アプローチ

硫黄島の活性化に向けて歴史的なアプローチを考えてみた場合、やはり「俊寛」の存在が挙げられる。俊寛とは平安時代後期の僧侶であり、1177年の鹿ヶ谷の陰謀によって硫黄島に配流された人物である。硫黄島には俊寛像や俊寛堂など、俊寛に関わるものが整備されてはいるが、全国的にその知名度は低いと思われる。そこで、ここでは俊寛などを活用し、地域活性化に向けた歴史的アプローチを考えてみたい。

### ○俊寛像周辺の整備

俊寛に関連する物として、硫黄島では俊寛像が建っている。俊寛の表情などがリアルで、俊寛の苦悩が伝わってくるような気がするが、その周りには公民館と芝生と歌舞伎役者の故中村勘三郎・中村勘九郎の手形のモニュメントがあるのみである。(歌舞伎については後述する) ちなみに公民館は硫黄島の住民がよく集う場だそうで、地域の中心的な施設となっている。そこでここでは、俊寛像を中心に周辺の整備をし、公園にすることを提案したい。公園といってもただ遊具を設置するだけではなく、何かしらの植物の名所化を目指す。先例として、霧島市にある和気公園を挙げる。和気公園とは、769年の宇佐八幡宮信託事件において、現在の霧島市に流された和気清麻呂を祀った神社の隣に併設されている公園で、藤まつりが行われることで有名となっている。この和気公園のように、俊寛像を中心とした公園を作り、観光地化するとともに地域住民の憩いの場として整備していく。また、公民館を活用し俊寛に関する資料の展示などを行うことで、俊寛の知名度をあげる工夫ができる。



### ○歌舞伎の招致

俊寛の名が一躍有名になったのが、九州新幹線開通関連イベントとして故中村勘三郎によって再演された三島村歌舞伎「俊寛」だろう。この時は県内外から多くのツアー客が硫黄島を訪れたという。そこで提案したいのが定期的に歌舞伎を硫黄島に招致することだ。歌舞伎の招致によって硫黄島の観光客の増加や知名度の向上が望まれる。また、歌舞伎と俊寛がコラボレーションした観光ポスターの制作や商品開発など、多方面での展開が期待できる。さらには、三島村歌舞伎「俊寛」のストーリーをもとに俊寛について紹介するような取り組みも行ってはどうだろうか。硫黄島には、中村座一門が硫黄島を訪れたことが強調されるばかりで、再演された三島村歌舞伎「俊寛」の内容や俊寛についての詳しい説明が見受けられなかった。全国的・世界的に知名度を誇る歌舞伎の活用は有効であると考えられる。

### ○史料保全

硫黄島には硫黄岳という活火山がある。現在も噴煙をあげ、活発な活動を行っている。

最近では 2013 年に硫黄岳山頂で小規模な噴火が起こっているようである。有史以来の噴火として最も古いのは 15~16 世紀に硫黄岳山頂で起こった噴火で、この時は火砕流が発生している。<sup>2</sup>硫黄島の村長大山氏の話にあったように、先日起きた口永良部島の噴火を受けて、硫黄島でも硫黄岳の噴火に警戒を抱いているということだった。そこで疑問に思ったのが、硫黄岳に関する記録保存の管理はどのようになっているのだろうかということである。例えば、大正 3 年に起きた桜島大正噴火だが、後世に生きる私たちに当時の記録が引き継がれることで、噴火の規模や人々の様子、噴火の予兆が分かるようになっている。これらの記録は現在の防災・減災に何かしらの影響を与えていると思うのだが、硫黄島において硫黄岳の噴火に関する記録の保存状態が気になった。このような災害に関する記録だけではなく、硫黄島において地域の史料は現存しているのか。現存しているのならば史料保存の状態はどのようになっているのか。史料を災害から守る視点、地域の史料を保全していく視点は、「自分たちの地域を知る」という観点から活性化の前提として必要だろう。

おわりに

硫黄島は温泉が湧き出していたり、温泉や硫黄が混ざり合うことで海の色を神秘的な色に染め上げたり、鬼界カルデラによる地層の変化が見られたりと、自然という面に着目すれば魅力的な資源を多く持つ島である。しかしながら、地域活性化をはかる上では自然だけではなく、多方面からのアプローチが必要になってくるだろう。今回は、つたない知識ながらも教育と歴史の観点から地域活性化の提案をした。人口の過疎化が進む中で、硫黄島が少しでも発展すればと思う。

---

<sup>2</sup> 気象庁ホームページ <http://www.jma.go.jp/jma/index.html> (最終閲覧：2015.7.17)